

本校舎 幼稚部グループ

1 研究主題

幼児同士の関わりを促す環境の工夫

2 研究テーマ設定の理由

本校舎幼稚部は、人工内耳を装着する聴覚障がいのある幼児が3名（5歳児2名、4歳児1名）在籍している。コミュニケーション方法は、音声言語、手話や指文字、文字、絵や写真の表示等である。少人数だが、友達や教師と関わりをもちながら、相手の話や気持ち、状況を理解しようと耳や目を向けたり自分の思いを伝えたりしている。昨年度までの研究で、テーマ「幼稚園教育要領に基づく保育～目指す10の姿を育むために～」の下で望ましい支援のあり方について検討してきた中で、「幼児同士で関わり合う」姿を目指したいという教師間の共通認識を再確認することができた。幼児の年齢やこれまでの経験から、友達との関わり合いが必要不可欠であり、成長に繋がる大きな要因となる。昨年度の成果である保育記録の共有や、課題であった環境整備に取り組みながら、自由遊びにおいて幼児が自分で考え、物や活動を介した働きかけや言葉など様々な表現方法で伝え合い、幼児同士で関わり合う姿を引き出していきたいと考え設定した。

3 推進計画

研究推進計画について示す。

月 日	研究活動	内 容
4月21日	第1回全校研究会	
5月16日	グループ研究会①	研究の進め方について検討・確認
6月22日	グループ研究会②	幼児実態共有、実践について
7月15日	グループ研究会③	実践、記録、検討
9月5日	グループ研究会④	実践、記録、検討
10月26日	グループ研究会⑤	実践、記録、検討
11月17日	全校研究	iPad 事例研究会
11月17、18日	研究大会参加	東北聾教育研究大会(宮城大会)
12月2日	学部研修会	石川敬氏 「思考力・表現力を高めるための指導と支援の在り方」
1月25日	グループ研究会⑥	グループ研究のまとめ
2月14日	第2回全校研究会	グループ研究の発表、全校研究のまとめ

4 授業（研究）実践

(1) 実態把握と保育環境の構成について

ア. 幼児同士の自由遊びの状況に注目した実態を教師間で共有した。

実態	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自転車などお気に入りの道具をよりどころとしている。 ・ 1つのことに集中することが少なく気になる場所や玩具を点々と移動して遊ぶ。 ・ 友達と役割を決めてやり取りをしながら遊ぶ。 ・ 走ったり自転車に乗ったり体を動かして遊ぶひとり遊びが多い。 ・ 友達と離れて遊ぼうとする幼児もいる。大人を介して伝え合うことが多い。 ・ 同じパターンや決まったものでの遊びを繰り返す。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の主張に耳を傾け、自分の主張を一步譲って友達と協調して遊ぶこと。 ・ 遊びを持続し、試行錯誤しながら楽しむこと。 ・ 自分たちで遊びの流れや役割を考え、創意工夫して遊べるようになること。 ・ 広い視野で様々なことに関心を示し、意欲的に友達の遊ぶ環境に関わること。 ・ 大人が見守る中で自分の気持ちを友達に伝えること。 ・ 友達と一緒にイメージを共有すること。

イ. 幼児同士の関わり合いに必要と思われる既存の保育環境について（以下4点）人的環境や玩具、教材などの物的環境、自然の環境、社会的な環境に区別しながら、より新たに必要な支援や保育の環境について検討を行った。

人的環境	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育士の表情、言動、服装 ・ 人間関係から生まれる雰囲気
物的環境	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遊具、道具、砂、土などの物理的な物 ・ 重さや固さ、色、形などの違い ・ 扉や机などの安全性や清潔性
自然環境	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校庭の樹木や水、土などの自然や生き物 ・ 太陽、風、空、季節の変化 ・ 室内の植物や木などの自然素材
社会環境	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域住民や周辺環境とのふれあい ・ 公共施設での経験 ・ 幅広い異年齢との交流

参考: 株式会社 officeEA コラム「保育園の環境構成とは?」、幼稚園教育要領、保育所保育指針

(2) 保育記録の共有と実践〈保育記録より〉 ○成果 ●課題

エピソード1 「自転車」

進級当初は幼児それぞれが「私が使う!」と自分の主張を押し通そうとする姿や無理やり力で取ってしまう姿が多くあり大人の仲介が必要だった。いつも自分を通してしまう幼児には「〇周乗ったら貸すか?」と問い、いつも諦めてしまう幼児には「私も乗りたい」と言えるように促すなどの声掛けを続けてきた。すると、徐々に幼児同士での貸し借りができるようになった。

生活が進むにつれ、自転車の補助輪を外して乗りたい。という心の成長が見られた。家庭での練習もあり、幼児2名は補助輪なし自転車にステップアップした。

- 少人数では1人で独占し思う存分に遊べることも多いが、自転車1台という限りある物で遊びを展開させることで、幼児は貸し借りを経験することができた。（物的環境）
- 時に教師が幼児とのやりとりに加わり、相手の立場や気持ちを感じられるように促すことで、幼児は、言って良いことや言われたら嫌な気持ちになること等を感じながら、言葉を使った貸し借りの経験を積むことができた。（人的環境）
- 補助輪なしの自転車に乗れる、他学部の生徒や友達が目標になった。（人的環境）
- 小さな自転車では待ち時間があつたが、2台の自転車によって待つことなく2人一緒に乗ることができ、満足感を持って遊ぶことができた。（物的環境）
- 十分に自転車に乗れることで、気持ちにもゆとりをもち友達や教師にも「乗ってみていいよ!」と自分から譲ることができるようになった。（物的環境）
- じっくりと楽しめる場面を多くとると、幼児同士での貸し借りの場面は少ない。遊びの様子を把握しそれぞれの幼児に声をかけ、貸し借りの場面を増やしていくようにした。



エピソード2 「虫とり」

本校は、ちょうやバッタ、かまきり、とんぼ、カタツムリなど四季折々で無数の生き物が生息する自然環境に恵まれている。虫嫌いだった幼児だが、虫取り網で捕まえることができた喜びや友達の勇敢な姿を見て「自分もやってみよう! やりたい!」という気持ちを互いに高め合った。

- 一度で終わりではなく、毎日繰り返せる豊かな自然環境と存分な時間の確保や飼育の支援が幼児の意欲を継続させることができた。（人的・物的・自然環境）
- 生き物を捕まえた後、弱ってしまう姿を見て、生き物に対する優しさが芽生えた。（自然環境）
- 教師の見本をみて網から素手へと変化し、生き物を触ったり観察したりできるようになった幼児もいる。（人的環境）
- 幼児同士で相談して、死んでしまったカブトムシのお墓を作ることを決めた。教師はあえて見守る体制をとったが、幼児が協力し合い一つのことに取り組んだ。（人的・自然環境）



エピソード3 「ままごと」

ホールでの遊びの発展性について検討し、机といす、制作用具（紙、ペン、テープ等）を設置した。はじめは「何に使うの?」と聞く幼児だったが、「好きに使っていいよ」と伝えると、「メルちゃん（人形）のお誕生会をしよう!」と幼児が考えて提案した。それまでは人形の世話をするなど個々にお母さんごっこをすることがメインだったが、ごっこ遊びを広げることができた。その後は食事やお店に使うなど、机といすを活用したり、紙に「くすり」と書いてごっこ遊びの道具を作ったりしながら遊ぶ姿が見られるようになった。

- 教師がリードして遊びの場を設定するだけでなく、自分で考えたり友達と話し合ったりする場面を設定した。（人的環境）
- 机を拠点として幼児3人が共通の目的で遊ぶ姿が増えた。女兒はパーティー、男児は宅配員になってケーキを届ける等、自分たちなりに工夫している様子があった。（物的環境）
- いすに座ることで落ち着いて遊び、同じ遊びを長く継続できるようになった。（物的環境）
- 少人数であるため発想の転換や新たな遊びにつなげるには教師のきっかけ作りが多数必要である。教師が遊びの一員となって引き続き、支援していきたい。



エピソード4 「サッカー」

幼稚園で日々取り組んでいる絵日記で「サッカー教室に参加した」というエピソードを発表した幼児がいた。教師から「みんなもサッカーをやってみようよ」と誘いかけると、普段は個の遊びを選ぶことが多い幼児も3人一緒になってサッカー遊びを楽しむことができた。

- 絵日記の発表で聞いたタイムリーな話題で教師が遊びの場を設定し、すぐに遊びにつなげることができた。（人的・物的環境）
- ルールのある遊びの中でチームに分かれたり応援したりすることができ、幼児同士でも声をかけ合う姿が見られた。（人的環境）
- 興味をもちイメージの共有ができると、遊びにつながりやすい。教師からのきっかけづくりを積極的に行うことと、幼児間でのイメージの共有を支援することで、遊びの広がり支援したい。

エピソード5 「お店屋さんごっこ」

お店屋さんごっこの経験はある幼児だが、実際にスーパーでの買い物学習を経験すると、「店長さん」という役や「〇〇コーナー」という言葉を遊びの中でも使うようになった。

- 3人が実際の買い物を同じように経験できたことで、自由遊びでのお店屋さんごっこのイメージを共有できるようになった。（社会環境）



エピソード6 「鉄棒」

校庭に常設してある鉄棒だが、以前から職員が促すも「できない」という気持ちが大きく遊ぼうとはしなかった。ある日、室内の太鼓橋を使い手足を引っかけて「ぶたのまるやき」ができたことから、「鉄棒でもやってみよう！」という気持ちに変化した。また、交流園で同年齢の幼児たちが鉄棒をする姿を見たり、一緒にやってみたりすることができた経験から鉄棒に対する意欲が高まった。

- 自由遊びの中で自然に、また全く別の体験から苦手意識のあることに挑戦するきっかけができた。（人的・物的・社会環境）
- 普段の生活だけでなく交流園での集団活動からの経験も大きなきっかけの場となった。（社会環境）



エピソード7 「長縄跳び」

A児は知識が豊富で物知りで活動の中心になることが多いが負けることが大嫌いで体を動かすことに不器用さがある幼児である。B児は運動が得意で、コツを掴むことが早く、教師が自由遊び中に勧めた長縄跳びをすぐに跳ぶことができた。A児は悔しさもあるが、自由遊びの時間内では諦めてしまった。

- 個別学習の時間に自分から「縄跳びやりたい！」と言い教師と2人で練習をし、根気強く続け、コツを掴んで複数回跳ぶことができた。本人も嬉しく、家族や他の教師にも伝えて、翌日から自信を持って自由遊びでも参加するようになった。(人的・物的環境)
- A児は「できないから。」と言い興味をもてなかったC児にも「やってみよう！練習するとできる様になるよ！」と伝えるようになり、C児もわずかながら挑戦してみようとする姿が見られた。(人的環境)
- 教師も含めて記録付けをして、より跳ぶことを目指した。記録をホワイトボードに書いて残すことで日をまたいで継続していたり、他の幼児も興味を持ち、友達の回数を数えたり数字を書いたりした。(人的・物的環境)
- 別の風船遊びでも記録を付けて遊ぶようになった。(物的環境)
- 負けたくない気持ちが大きくなり涙することがある。悔しい気持ちに寄り添いつつも、前向きに取り組めるよう競い合う様々な場面での経験ができるよう支援したい。失敗からの学びの場面を大切にしていきたい。

エピソード8 「だるまさんがころんだ」

ホールに設置した机を使い幼児が誕生会のままごとをしていたところ、小学部児童が興味を示し、その場で一緒に遊びが展開された。さらに後日、小学部児童が「だるまさんが転んだ」をしているところ、幼児が興味を示し、教えてもらいながら一緒に遊んだ。

- 遊びの場を共有し、関わる友達が広がった。日常の中でも、小学部児童との何気ない会話が増えた。(社会環境)
- その他の行事を通して中学部や高等部の生徒との関わりや憧れが生まれ、自由遊びや日常での交流ができた。(社会環境)



(3) 東北聾教育研究大会

宮城県立聴覚支援学校の学校公開、早期教育分科会に1名参加し情報共有。

分科会研究テーマ「豊かなかかわりと、言葉を育む支援の在り方」

助言者：庄司 和史 氏 (信州大学教授)

助言内容：乳幼児期の子どもは特に、言葉に限らない様々な表現、表出をしている。それを受け止め、発達段階や興味、特性に応じた活動の展開が各校でなされている。言葉の習得の基本は共感の蓄積であり、復唱させた言葉へ応答する形で返答すること、子どもの思いをその場で言語化することを継続してほしい。時代の変化に伴い、様々な情報を収集できる反面不安が募る世の中で、早期支援の重要性が増している。家庭や関係機関と連携して個に応じた支援をしていく必要がある。

所感：各校の発表では、重複児の在籍割合の増加、幼児の実態に合わせた活動の工夫、関係機関との連携の重要性、社会の変化に合わせた体制整備の必要性などが話題となった。通学距離や両親の就労状況など、難聴児の実態のみならず多様化している家庭との連携、望ましい支援体制の在り方をアップデートする時期に来ていることを感じた。聴覚障がい教育の特徴である言葉を育む上で大切なことを再確認し、今後の教育活動に役立てていきたい。

(4) 幼小学部研修会

研修テーマ「思考力・表現力を高めるための指導と支援の在り方

～自己理解と他者理解のもと未来を切り拓く～

講師：石川 敬 氏（元 盛岡聴覚支援学校校長）

内 容・聴こえない、聴こえにくいこと

- ・思考力・表現力、自己理解と他者理解
- ・経験と対話を通して失敗と過程の重要性
- ・サリバンの手紙、サリバンの記録からヘレン・ケラーとの関わり
- ・聴こえない、聴こえにくい人のセルフアドボカシースキル（自分を活かす交渉術）
- ・デフフッド（Deafhood）を導入した聾教育の実践
- ・社会を変えていく企業の取り組み スターバックス国立店 等

経験と対話について、専門性の前に目の前の子どもをみること、等、日々の関わりの中で、私たちが意識して考えていかなければならないことを改めて学ぶことができた。

5 実践のまとめ

(1) 成果と課題

- 自分たちで解決したり、相手の考えを聞いたり、それぞれが自分の考えを述べたりするようになった。
- 自分から友達に関わろうとする姿が増えた。同時に友達との対話も増え、言葉の成長へとつながっていた。
- 勝敗にこだわるできるようになったり、友達同士で応援したり励ましたりすることができるようになった。
- 学部を超えて、異年齢集団で関わる場面が見られた。多くの教職員や児童生徒との関わりを日常的にもつことができ、特別支援学校の良さを感じることができた。
- 少人数の良さを生かしながら、様々な人との関わりを広げるための場をより多く設けること。
- 遊びに発展性をもたせるための教師の工夫を学び継続すること。

(2) まとめ

本校舎幼稚部は、小規模な集団であるため、幼児同士の関わりに限りがあるが、その中でも関わりを引き出すための工夫や、教師の役割がとても重要であることが確認できた。また、幼稚部の生活では、幼児が遊びを通して様々な経験をし、心が大きく成長する過程も多く見ることができた。教師が、幼児の疑問や気付きに寄り添い、イメージを表現し共有できるようにすることや、前向きな気持ちで挑戦していく幼児の支えとなることが、関わり合う一つのきっかけになり成長へとつなげられた。時に教師はあえて見守ることで、幼児が自分たちで考えを出し合う姿も印象的だった。こうした工夫は、聴覚障がいのある幼児の言葉の理解や習得のきっかけとなったのではないかと考えられる。これからの支援に生かし、幼児教育と聴覚障がい教育との両面から研修を深めていきたい。